H28.3.2　第１回聖籠町生涯活躍のまち構想研究会　議事要旨

〇町長あいさつ

〇委員自己紹介〈省略〉

〇会長及び会長代理の選任
事務局
　続きまして、この研究会における会長と会長の職務を代理する方の選任についてでありますが、研究会の要綱上、会長は委員の互選によりこれを定めるとあります。会長の職務を代理する方については、あらかじめ会長が指名した委員がその職務を代理すると規定されています。今回は初めての会議でもありますので、特に皆さんから異存がなければ、渡邊町長から会長と会長代理についてそれぞれ推薦したいと思いますが、いかがでしょうか。

（異議なしの声）

　異議なしということですので、町長から推薦をお願いします。
町長
　皆さんからご同意を得ましたので、僭越ではありますが、これまでの経過を踏まえながら、造詣の深い方が一番いいだろうということで、先ほど五十嵐オブザーバーからも話がありました、窪田昌行さん、高齢者健康コミュニティの代表であります。先生に会長をお願いし、そしてサポートする意味で、聖籠町の町民の方であれば一番いいんでしょうけど、町民の方はこの辺のことをまだ今日初めて耳にするような方ばかりですので、総合計画などでご指導いただいてきた地濃先生にお願いしたらどうかなと思いますが、よろしいでしょうか。

（異議なしの声）

　それでは会長に窪田先生、会長代理に地濃先生、よろしくお願いします。

〇会長、会長代理あいさつ（省略）

〇議事

・議題１　研究会立上げの趣旨について事務局説明
会長

質問・ご意見がありましたら挙手の上ご質問いただければと思います。

質問なし。

・議題２　当面のスケジュール案について事務局説明
会長
質問・ご意見がありましたら挙手の上ご質問いただければと思います。

質問なし。

町長
　スケジュールについては事務方の都合ではなくて、委員の先生方の、遠方から来られる方もいらっしゃるので小刻みにもできないだろうということで、1か月に１回くらいであればということで配慮しながら事務局が作ったのでご理解いただければと思います。

会長
　他に委員の皆さまから２つの議題以外で質問やご意見がありましたらお願いします。

委員
　資料２の方なのですけれども、初めてこういうものを見たのでよくわからないのですが、国の動きの中で東京圏をはじめとする地域の高齢者の希望に応じ、地方や「まちなか」に移り住み・・・とありますが、この「まちなか」って何なのでしょうか。

事務局
　会長お願いします。

会長
　「まちなか」というのは、新潟県の中でまちの部分があると思うのですが、（新潟市とか長岡市とか）聖籠町も、そういったところに県内の中で移動すると思うんですね、そういった意味での「まちなか」です。当初の日本版 CCRC での中間発表にはなかったのですが、やはり全て東京圏から一気にというのは現実的ではないだろうと、そういった意味で、東京圏の方もありますが、それと同じように県の中や隣県の中での「まちなか」です。コンパクトシティといいますか、集積していくというひとつの流れがありますので、そういう意味での「まちなか」でございます。

委員

要するに田舎に行くのではなくて、ちょっとした「まち」のところにもコミュニティを作りたいということですよね。

会長
希望に応じて、田舎が、田園地域が好きな方もおられますし、そうでない方もおられるので、両方ということでの定義になろうかと思います。

委員
ありがとうございました。

会長
他に何かございますか。

委員
すいません、総合戦略の案を見ればいいのでしょうけれども、これは人口ビジョンの推計は社会減がどのくらいになっているのですか、2060 年のものは。社会減と自然減で分けて推計されたと思うのですけれども。

事務局
すいません、今回は細かく資料で内訳までは示していませんが、簡単に言いますと出生率の問題もありまして、出生率は聖籠町の場合、住民の希望が結果をとったら 2.14 という数字が出まして、2.14 というのが結構高い数字で、国は 2.1 あるいは 2.07 なのですがそれを 2.14 に 2040 年に向けて近づけるという形で試算をしたときに、どうしても自然増減で減のほうがある程度、2030 年頃まで進むのですけれども、2040 年以降から自然増はプラスになってくるということがあって、社会増減はもしかするとほとんどない・・。
現状で 2005 年から 2010 年に聖籠町で起こっていた社会増減ですね、その移動が今後も継続するような形で設定をして推計をしました。そうすると若干社会増が多いかなと。

委員
わかりました。

会長
他には何かご質問はございますか、よろしいでしょうか。
それでは本日の議事につきましては終了いたしまして、後の進行を事務局のほうへお返ししたいと思います。

○会長講演（省略）

事務局

窪田会長ありがとうございました。せっかくの機会でありますので、窪田会長からお話いただいた内容について何かご質問等はありますでしょうか。

委員

今、お話を伺いまして、初めてこういうものに触れて、ちょっと理解が足りないのでお伺いしたいのですが、聖籠町がこれから始める CCRC の全体の流れというのは、先ほど先生がお話しされた中の ARC から CCRC へ移行するという形でのアメリカの事例がありましたが、それをイメージして考えていけば、総合政策的なものをイメージして考えていけばよろしいのでしょうか。

会長

私はアメリカの事例を説明しましたが、後はみなさまの議論の中で聖籠町を ARC のようなものにしていくのか CCRC でいいとか、そういったものを皆様の議論の中で進めていただいて、私はアメリカには 2 種類コミュニティがあると説明しましたが、後は皆様の議論の中でどういったものを作ればいいか全体像を考えていただくのがこの会の趣旨だと思いますので、今、形あるものはないのではないかと思います。

町長

基本的には研究会ですから今後聖籠町の構想をしていく場合に、どういう問題があるか、一番課題なのは、一般の町民の皆様方が考えた場合課題になるのは、最後に出たメリット・デメリットがどうなのかという問題があります。例えば首都圏から高齢者を抱き込んで医療費が高騰した、介護保険料が上がったという、そういうマイナス面だけではどうなのだと、リスクだけ負うのではないかというイメージが大きいわけです。今、お話があったのはそうではないところもあるわけです。

それを聖籠町の場合、せっかく病院ができるので、病院を核とした中でひとつのコミュニティゾーンをつくって、CCRC がいいのか ARC がいいのかは別問題としても、私がイメージしているのは、ただ単に高齢者の生活ゾーンだけを作るというイメージになってしまうとリスクの問題がどうしてもウエイト的に印象が強くなってしまう。それではうまくないだろうということで会長も日本の全体の動きがわかる立派な・・NHK のクローズアップ現代でも放映されていたように、当時はリゾート的な感じでやってきた経過があり、そこは失敗してきたというのがあります。しかしながら、その過程の中でいわゆる高齢者だけのコミュニティゾーンではなく、そこに若い世代も入れてゾーンを作ることによって活性化されていく。

例えば若い世代は子供の世話をしたり、いろいろな共通意識を持つというのですかね、ふれあいをやることによって。そういうことによってさらに活性化されていって、いい意味での日本版 CCRC という構想が活力を見出してきたという報道もされていましたけれども、私のイメージしているものも、できれば高齢者だけのゾーンではなくて若い世代のゾーンを作る。そして病院を核とした場合に、新潟県もそうなのですけれども、看護師さんとか保育士さんとか幼稚園の教諭とか不足しているんです。そうなった場合にそういう所に専門学校を誘致して、そこで学ぶ皆さまの宿舎とか、そういうものを一体的なコミュニティゾーンとして作っていくという、新たな発想の中でできないのかなというイメージを持っているんです。

それは皆様方に色々とやってもらわなければと思うんですけれども、そのことによって日本型の CCRC イコール聖籠版 CCRC といったらいいのでしょうか、そういうものをイメージできるかどうかは皆さまが窪田先生の指導を受けながら、必ずしも講演の中でお話のあったアメリカ型に限定されるものではなくて、柔軟な考え方の中で議論していただければ。

会長

今、皆様のご経験を踏まえてどうすれば聖籠町独特の CCRC ができるのか、そういったところを議論の、研究の場になろうかと思います。形あるものはまだないんじゃないかと思います。

委員

すみません。2 つだけアメリカの実情を教えていただきたいのですが、アメリカ全土 2000 か所以上 CCRC があるというお話なのですけれども、当然既存の住宅から移り住むという形になっていると思うのですが、その選択をする場合というのは、その住んでいるまちにある CCRC に移り住むのか、それとも別の選択肢で移り住むのか、そこらへんを教えていただきたいのと、それから日本の場合の CCRC というのは、基本は今までの介護施設というのは、自分が住んでいる居住しているところのそばにある介護施設に入るというパターンですよね。ところが今回の日本版 CCRC というのは、首都圏の人たちを地方の CCRC に移住していただくというスタンスですよね、そのへんを踏まえた場合アメリカの実情がどうなっているのかというのを教えていただきたいというのが一点。

もうひとつは事業化のお話が先ほど出ましたが、経営主体がアメリカの場合は NPO 法人ですよね。そうすると NPO 法人ですと基本は営利事業をやらないのですけれども、この辺で開発資金の調達はどのような形で行っているかというのを教えていただきたいです。

会長

アメリカの CCRC が 2000 か所ある中で、ご家族がいるとか、そういった近くに移り住

む、やっぱりそうですね、日本でいう 20 キロ圏内に大体 70 パーセントの方が移住している。

委員
　そうすると、日本版の CCRC をやるとしたらアメリカの場合とは実情が違いますから差別化が必要ということになりますか。

会長
　ただ、先ほどの東京圏の方を全部移住するというのは無理があると思うのですよね。やっぱりこの聖籠町、新潟に故郷があるとか、ふるさとであるとか、もしくは何か働いていたりご縁があるとか、何らかの形で。おそらく、ほとんどの自治体の方と話をするのですけれども、作られたときに県内ぐらいから 7 割～8 割くらいの「まちなか」への移動をする。それから首都圏から 2 割、やっぱりなんらかのご縁があるとか、それともあるいはものすごく評判がよくてそこに移り住むとか、そういったことになろうかと思います。

委員
　そうすると、ある程度マーケティングというのも必要になってくると思うのですよね。

会長
　マーケティングは必要ですね。今おっしゃったようにニーズ調査とかで、関東圏の方で新潟県出身の方がどのくらい希望されているのかとか。おそらく新潟市はやっているのではないかと思うのですけれども。
　それと、先ほどの事業の組み立てなのですけれども、NPO は入居者を中心とする組織で、開発主体が資金を調達します、民間ですね。シニアコミュニティデベロッパーという職業がございまして、そういったものともうひとつはケンドールの一部なんですけれども、入居者の方が手を挙げて、資金を集めてやる場合。ただやっぱりどちらかといえばシニアコミュニティデベロッパーというところ。一番大きなものはサンライズという会社なのですけれども、これはご夫婦で始めて今はマリオットという大きなホテルグループに買収されたところなのですけれども、そういったところが資金を調達したり、一部はファンドを活用したり。
　ですから、そういった意味で今回の計画も運営推進法人という民間であり企業法人であり、それから開発主体と経営の組織をどうするかわかりませんけれどもアメリカでは NPO という非常に公益性の高い団体が、ある CCRC は入居者だけの評議委員会を持っている、そして入居者はお年寄りですから、もうひとつの評議委員会がその評議委員会の代表、地域の元銀行マンとか弁護士さんとか、２つの評議委員会で経営を判断して、運営は外注しているわけですね、委託する。運営は何らかの形で悪くなれば替えるとか、入居者の持ち

物とした形でリーマンショックでも非常に安定していたような状況です。

委員
　入居金も信託財産化しているってことですよね。

会長
　いえ、一般的には入居一時金を NPO が蓄積して集まった時点で開発会社が買い取る形です。

委員
　わかりました。ありがとうございました。

委員
　よろしいでしょうか。たまたま町長のご指摘と他の委員からご指摘のあった２つが非常にキーワードになるような気がしますけれども、ややもすると呼び込み、移住だけと、例えば東京圏のそういう人たちを呼び込んで、ふるさと活性化するという思いにすぐなりがちだと思うのですけれども、新幹線もそうですね、新潟に新幹線もできたから。モノは手に入りますけれど、気候風土というのはどんな条件でも持ってくることはできないですよね。そういう意味で呼び込みだけの選択肢のなかに、新潟は緑が豊かだ、食べ物がいいといっても中々こういった気候風土に選択肢を理解してもらえる方がいるかどうかというのは非常に大きな問題なんです。
　そのへん国は何か基準をあげるときに何か異論・意見が出たのか、まあそれは後として、町長が言われるようにあんまり当初からでかいことを考えるよりはむしろこのふるさとを理解している、あるいは東京にいても自分が生まれ育って気候風土は体験していると、そういうなかに町で迎え入れる、あるいは町の町民同士が、それが「まち」の移動というコンパクトにした話として位置づけられているのですか。

会長
　そうですね、総合戦略の中で４つの、雇用の創出と人の流れ、子育て、そして地域の集積関係があるわけですけど、人の流れのひとつの政策としてやっぱり雇用を。「まち・ひと・しごと」となっていますけれども、政策の上では「しごと・ひと・まち」なんですよね。
　仕事をまず作って、人を作って、まちを作る。だからその中の生涯活躍のまち、日本版 CCRC というのは、どちらかというと高齢者に新しい暮らし方を提案すると、それが CCRC であれば最後まで健康な状況からできるだけ寝たきりにならないように健康寿命を延ばして、万が一認知症になっても同じ場所で生活できる、安心した仕組みがアメリカには CCRC という形であるわけですね。ですから色々な総合戦略がある中でこの生涯活躍のまちとい

うのは、そういった CCRC を参考として高齢者に新しい暮らし方を聖籠町が提案すると、それに共感したご縁のある東京圏の方たちが来るという。

委員
　そのご縁のあることは大事だと思うんですよね。まずは町民の方々の高齢者の生き方、あるいは心の豊かさができあがっていて、その周辺では新潟とか、あるいは聖籠町から新潟市あるいは長岡市に住んでいる身近な人たちもここはいい所だと再確認して、東京の人たちが、そういう意味で多少なり人口が増えるということは理想だし仕事もそれで増えるというのが一番いいかもですね。あまり東京の高齢者を呼び込んで施設がいいから来いというのは人の取り合いだけの話なので。

会長
　おっしゃるとおり、この地域の中でまずは聖籠町で住んでいる方々に自立した形で住まえるようなものってまだ出来ていないと思うんですね。そういったものを提供して、モデルを作って、結果として新潟県の中でもいいし、良さを知って東京圏からも来るということではなかろうかと思います。おっしゃる通りだと思います。

委員
　偶然、先生方が２つの、選択肢という問題と地域という問題と、私もそこがこの委員会で進めることかなっていう、あまり話が日本版どうのこうのって、あるいは医療福祉の、お金の豊かな人は確かにゴルフもできるということもあるけどそこまで熟している段階でもないし。

会長
　そうですね、価格帯をどうするかという問題もあるし、それはこれから検討していくことだと思います。

委員
　ここの物差しに合わせたものを作っていくのがいいかと思います。そういうスタンスでうちは考えていると。

町長
　県内では南魚沼市が先駆的に取り組んでいるんですよね。あそこは大学を核としてひとつの日本版 CCRC をこれから動き始める。そういうものと同じ環境で議論を進めるのではなくて、聖籠町の現状の中で病院を核としたなかでどうしていくかという、そのあたりの。

会長

聖籠町独自の、みなさんの意見を出していただいて。

オブザーバー

私はいま新潟と埼玉と千葉で先ほど申した通り運営している中で、先ほど委員からキャッシュの面で、難しく考えればいろいろなものがあるんでしょう。もっと言えば介護保険というのは日本にあって、アメリカにはない。どのようにビジネスモデルを作るのかというのは非常に大きな問題であるのですけれども、簡単に言うと、土地の有効活用で作る人がいる、それと運営する我々がいる、そういうことだと思うんです。

つまり、施設を作る人がいる、それを運営するプロがいる。そこでどういうふうに資金計画を作っていくかというと、賃料を払うというような具合なんですね。我々がそれを運営する時に日本ではどういう形かというと、賃料がある、食費をもらう、それから介護保険サービスを使うときに介護保険がある。それが運営サイドのビジネスモデルに今なっているんですね。では、アメリカはどうかというと介護保険というのはオフィシャルにないですから、基本的に若いうちに保険に入っておいてリタイヤメントしたら民間の保険会社から給付を受ける、あるいはお金をもらってやる。ですから、この会議でどこまでやるのか、これは国家の問題、色々な問題があるので非常に奥が深い。

さらにさっき委員からご意見が出たんですけれども、寒い、雪がある。たしかボルチモアは雪が降っていましたよね。ですから気候はさっき言ったサンシティ、あれはアリゾナにありますよね、つまり暖かいか寒いかというと暖かいわけです。たとえば東京の杉並区が伊豆と連携して、杉並区は用地がないから設置できない。すると伊豆市でしたかね、あちらに作って杉並区民を向こうへやる。

これは第 1 回目ですから結論は出ようもない、しかしながら出さなければいけない。私が実際いくつかの事業をやっていて思うのは、あまり難しいことを考えるのも無理ですし、最初はシンプルにトライアルしながら。ただ、この地域が唯一、他と決定的に違うのはやっぱり港があって、いま CCRC というと高齢者といいますけれど、われわれ人間は高齢者であろうと若年者であろうと産業があって、そこに起業して、リタイアしたらそこで暮らす。これはどこでも変わらない。聖籠町の唯一の特徴は港があって、地震があると日本海側で唯一の拠点になりうると。ですから第 1 回目であまりまとまったことも言えませんけれども、そういう拠点性あるいは独自性をシンプルに議論しながら積み上げていって、私は別の会議でも人口問題など色々な会議に出て関わっているのですけれども、人口問題というのはもっと複雑で自然増社会増なんて言っていますが、アメリカは人口が増えています、移民がある。では移民まで議論するのかという非常に複雑怪奇な議論もあるわけですね。

そういう意味で第 1 回目の会議はこういう事柄で、今後どういう風に進めていくのかというときに、よりシンプルにかつ聖籠町という位置づけを明確にしながら。ではどこから

いくのかと、これはもう事業として考えるときにはキレイ事だけ言っていられませんから、こうなったら町長にトップセールスで 23 区の区長全部に会ってもらって、東京都知事にも会ってもらって、我が町に来てくれということからやらなければいけないと思うんですよ。そういう会議にしていったらきっと半年後には何らかの形ができる。私は金融機関というのは非常に大きな立ち位置があると思っているのですが、例えば不動産のレベルからいったら、日本ではまだ無理ですが、リバースモーゲージとか、空き家をどうするのか、これは当然金融が関わってきますので、こういうお知恵を拝借しながらやっていったらいいのかなと思います。

会長

この会議の中でいろいろ難しいものがありますけれども、積み上げていってですね、ひとつの形を、皆様の中から新しいものが生まれるのではないかと思います。よろしくお願いします。

事務局

他にご質問等はございますでしょうか。ないようでしたら、これで講演を終わりたいと思います。